

手術成績：術後2日以内に歩行を許可し、頸部カラーを3ヶ月間着用させた。術後経過観察期間は、2ヶ月～1年7ヶ月、平均1年であるが、術後経過は良好で、全例、神経症状の改善が得られた。

術後 x-p 所見：術後、移植骨の脱出、後弯形成、偽関節形成はみられず、再手術例は認められなかった。

2B-20) 環軸椎脱臼の手術治療

秋野 実・阿部 弘 (北海道大学)
岩崎 喜信・飛驒 一利 (脳神経外科)

これまで当科において環軸椎脱臼症例で手術施行した総数は79例である。これら79例の術式の内訳は、後方到達法が55例、経口的到達法が23例、経口のおよび後方

到達法両者併用が1例であった。後方到達法では C1 の椎弓切除後、後頭骨 C2 間の後方固定を施行したものが14例で、残りの41例は C1 の椎弓切除施行せず後方固定を実施していた。手術術式の選択は、前方からの偏位歯突起により上位脊髓の圧迫がある場合は経口的到達法で除圧固定を行い、整復可能な場合は後方固定を行うことを原則としている。当科での後方固定は、まずステンレスワイヤーで環椎後弓と軸椎椎弓とを内固定したのち、腸骨から移植骨を採取し、一枚板移植法で固定を行っており、術後強固な固定が得られている。

当科での手術選択の基準を呈示し、さらについて手術術式上のポイントについてこれまでの臨床経験をふまえて解説する。